

「総合」をどうとらえるか

——「年間指導計画案」を中心として——

中 谷 雅 彦

○ はじめに

現代文、古文、漢文を、それぞれ別々の授業で指導することに慣れたものにとって、総合国語としての「国語Ⅰ」の教科書にはとまどいを覚える。

あるべき「国語の力」への志向と学習指導の効率化というところから生まれた総合国語としての「国語Ⅰ」の「総合」をどうとらえて具体的に指導していくかが、「国語Ⅰ」の指導のあり方を考えるときの最も大きな課題のように思える。

「国語Ⅰ」の指導のあり方について、具体的に一冊の教科書をとりあげ、「総合」ということを年間指導計画の中にどう位置づけていくのかという観点から提案することにする。

一、年間指導計画案の視点

1、「国語Ⅰ」の性格と内容

新学習指導要領によると、「国語Ⅰ」の性格と内容については、次のようになっている。

(1) 目標

「現代の生活に直接つながる国語の基礎的・基本的な能力を身につけさせるとともに、言語文化への関心を深めさせることによって、生徒の人間性の根幹を養うための科目」

(2) 中学校国語との関連

「中学国語との関連を密接にしなから、その内容を発展させたもの」

(3) 構成

① 「現代国語」と「古典」に関する科目の基本的な内容を整理して構成された総合的な科目」

② 「選択科目「国語Ⅱ」、「国語表現」、「現代文」及び「古典」の学習の基礎となる科目」

(4) 内容

内容は、「表現」、「理解」の二領域及び言語事項からなる。

2、「国語Ⅰ」教科書について

「国語Ⅰ」の教科書は十七冊（十三社）あるが、単元・教材配列の観点から分析すると、次の四つの類型になる。

A、現代文 古文 漢文 (三部構成)

B、現代文 古文 現代文 漢文 現代文 古文 …… (ジャンルによる単元配列)

ジャンルによる単元配列

C、現代文・古文・漢文 現代文・古文・漢文 …… (テーマによる融合単元の配列)

による融合単元の配列

D、現代文 古文 漢文 現代文・古文 現代文 古文

現代文・漢文 …… (BとCの混合)

Aは従来三分冊になっていたものをそのまま一冊にしたものである。この型は十七冊中一冊だけである。この教科書の場合は、「現代国語」と「古典」を連続した言語文化として総合的に扱うべき点とする。「国語I」の基本的理念・性格をどう具体化するのかがという点に大きな課題があると思われる。

Bは「中学総合国語」とほぼ同じ型のもので、十七冊中十四冊と圧倒的に多い。中学国語と関連を持たせて総合的な教材配列となっている。しかし、単元(教材)間の関連は必ずしも明確ではない。この教科書の場合は、総合化という観点から教材をどう関連させていくかということ、また、古典文法の体系的な指導をどう工夫するかなどが課題となると思われる。

Cはあるテーマ(たとえば、「自然と人間」「愛と死」など)のもとに現代文・古文・漢文の教材を融合して配列しているものである。総合化という観点からすれば最も徹底したものである。この教科書の場合は、一つ一つの教材を理解しただけでは十分でなく、それらの教材の学習を通してテーマをより深く認識するという一段高い認識が要求され、A、Bと比べると程度の高い類型の教科書とい

えよう。

Dは、一部テーマによる融合単元をもうけているもので、BとCの混合といえる型で、十七冊中一冊のみである。

3、学習者の意識

高校一年生の一学期末(昭56・7)の現代国語の授業において、(1)一学期の国語の学習を振り返って、(2)「中学総合国語」と高校国語(現代文、古文、漢文に分化)とを比較し、どちらの教科書の方が学習しやすいか、の二点について感想・意見を書かせた。

(2)についてであるが、「中学総合国語」がよいとしたものは四十五名中十七名いた。その主な理由としては、「内容がやさしい。現代文、古文、漢文が別々だと専門的になってむづかしい。」「三分冊だと徹底して勉強できない。」「別々だとごちゃごちゃする。」「関連がつかめない?」「一人の先生の方がわかりやすい。」「テストが一つで楽である。」「などの意見が多かった。また、高校国語がよいとするものは二十一名いたが、その理由としては、「専門的になり、くわしくやれて(とくに古文)力がつくようだ。」「いっしょだと知識が断片的になる。」「内容もこんがらからないのはつきりしてくる。」「頭のきりかえがきく」などの意見が多かった。また、「どちらでも同じ。」「一長一短」としたものが七名いた。

これらの感想・意見から考えられることは、現代文、古文、漢文は連続した言語文化であるという認識のもとに、教材を密接に関連させるとともに、それぞれの教材の特性を生かした指導がなされなくてはならないということであろうと思われる。

二、「国語Ⅰ」年間指導計画案の基本的考え

——「総合」という点に関して——

今まで述べてきたことから、「国語Ⅰ」の年間指導計画作成に関して、基本的に次のようなことを考えた。

1、「総合」とは

- A、古典と現代文の教材を総合して指導する。(教材の総合化)
- B、総合的な方法で指導する。(方法の総合化)

(1) Aに関して

① 導入・基本教材と、あるいは前後の教材を、関連させながら指導する。(教材関連学習)

② テーマを設定し、古典と現代文教材を融合する。(主題単元学習)

③ 指導の体系

(一学期) (二、三学期へ一部主題単元へ)

基本学習 → 教材関連学習 →

「国語Ⅱ」で八学期に一つ

主題単元学習

(2) Bに関して

「表現」と「理解」の関連学習——「表現」指導の体系化をはかる。

2、総合性ということから一人の指導者が担当する。

三、「国語Ⅰ」年間指導計画案

本校では、米年度(昭和57年度)からの「国語Ⅰ」の指導にあたって、具体的には、次のことが決定している。

- 1、単位数……5 (二年……「国語Ⅱ」4 「古典」1、三年……「文科系」V 「現代文」3 「古典」3 「理科系」V 「現代文」3 「古典」1)
- 2、担当……教科書を分割しないで一人が担当する。
- 3、教科書……「精選国語Ⅰ」(明治書院)

この教科書の目次は次のようである。

Ⅰ 1 人生と言葉——随想——

自己発見

言葉の力

2 古文に親しむ——軍記物語——

平家物語(忠度の都落ち) 木曾の最期(参考) 祇園精舎

3 小説(一)

物と心

羅生門

古都

4 漢文に親しむ

格言・成句

故事(苛政猛於虎也) 奕翁馬 漁父之利

唐詩(登鶴鶴樓) 春曉 送元二使安西 春夜洛城聞笛

5 意見と表現

言語と文章

谷崎潤一郎

湯川 秀樹

大岡 信

小川 国夫

芥川龍之介

川端 康成

5	手紙と報告 山の便り	梶井基次郎・林芙美子
4	中国の散文 富岳百景 十八史略(鼓腹撃壤 采薇之歌 鷄口牛後) 章) / 孟子(二章)	志賀 直哉 大宰 治 論語(五
3	小説(一) 城の崎にて	志賀 直哉
2	日記と物語 自然への回帰の旅 伊勢物語(あづま下り 筒井筒 渚の院)	辻 邦生 唐木 順三 貫之
② 1	自然と人間―随想― 鳥と名と	唐木 順三
6	詩歌 命拾い	安部 公房 深代 惇郎
	鯨 / 高村光太郎 小景異情 / 室生犀生 鶯のうへ / 三 好達治 雪の日に / 吉野弘 藤の花(短歌十五首) 正岡子規 与謝野晶子 石川啄 木 斎藤茂吉 宮柗二 手毬唄(俳句十五首) 高浜虚子 水原秋桜子 中村草 田男 加藤楸邨 杉田久女	

6	氷期の野尻湖 和歌の流れ	井尻 正二
	万葉集(十首) 古今和歌集(七首) 新古今和歌集(十 首)	
③ 1	社会と個人―評論― 青春について 日本文化の雑種性 隨筆と紀行 方丈記	中村 光夫 加藤 周一 鴨 長明
2	徒然草(つれづれなるままに 神無月のころ 花は盛 りに 世に從はん人は) 奥の細道(旅立ち 平泉 象潟)	兼 好 松尾 芭蕉
3	近代を開く文章 あひびき たけくらべ 草枕	ツルゲーネフ・二葉亭四迷訳 樋口 一葉 夏目 漱石
4	中国の韻文 唐詩十首(鹿柴 秋風引 峨眉山月歌 磧中作 楓橋 夜泊 山行 登岳陽樓 登高 八月十五日夜禁中独 ： 聞白楽天左降江州司馬)	
5	戯曲 箱	
	【表現の手引き】 1 正しく表現するために 2 文	

章の種類 3 感想文・随想文 4
手紙文・報告文 5 評論文・論説文

【作文の手引き】

1 文章の構成・言葉の運用 2
推敲の効果 3 書き始めと結び
表現の工夫

【言葉の手引き】

1 古語から現代語へ 2 和語と漢語 3 言葉のきまり 4 話し言葉と書き言葉

〈漢文のきまり〉

1 訓詁の手引き 2 基本句形のまとめ 3 近体詩のきまり

付録

文法要覧 日本文学史年表 重要古語の解説及び索引 当用漢字

音訓・送り仮名一覧表 当用漢字

音訓表・付表

「国語Ⅰ」は初めての試みであり、まずは教科書に即した指導を行いたいと思う。

この「精選国語Ⅰ」の特色としては、次のようなことが考えられる。

(1) 三部構成

一学期に①を、二学期に②を、三学期に③をという編集意図がうかがえる。

(2) 単元配列類型はB型である。

(3) 各部の最初にテーマ単元を設定している。

(主題単元の展開を可能にしている。)

(4) 韻文は古典、現代文それぞれ一括してとりあげられている。

(5) 「表現」単独の単元は設定されていない。

4、年間指導計画案

「国語Ⅰ」の年間指導計画を、次表(九八〜一〇一ページ)のよりに考えてみた。初めての試みでもあるので、できるだけ教科書の特徴を生かすことを基本にして計画を立てた。なお、三学期の部分は省略する。

「総合化」のために、単元(教材)の位置づけをどうするかという観点から述べることにする。

◇一学期

一学期は、高校生としての、高校国語学習の出発点であることを学習者に自覚させ、それぞれの単元(教材)をそのような観点からとらえさせたい。

最初の単元「人生と言葉」の中の「自己発見」と「言葉の力」は冒頭の教材としては格好の教材だと思われる。「自己発見」は湯川秀樹自身の体験を語る中で、自己をみつめ、新しい自己を発見しない再発見していくことが創造的に生き続けることを可能にするということを述べた高校一年生にとっては説得力のある内容のものである。また、「言葉の力」は、「一つ一つの言葉はまことに頼りない。

しかしその、頼りなくさやかなものの集まりが、時あって驚くべき力を発揮するところに、実は言葉の昔も今も変わらない偉大な力があるのだ。」ということを、古典作品などを引用しながら具体的に述べたものである。国語教育の基本にして究極の目標が、言葉を

「理解」と「表現」(書くこと)の関連(「表現」指導の体系)

○筆者の“体験と思索”を参考にして、中学時代の自己の“体験と思索”を簡条書きにする。

○高校生になつての抱負を原稿用紙2枚程度に書く。(主題・表記)

○論旨を展開するに当たつて、どのような材料を使つているか整理する。

(取材)

○一文の長さ、文末表現の特色に注意し、作品の表現の特色をまとめる。

○読みとつた下人の人物像をもとにして、その後の下人の生き方を想像して書く。

○描写のすぐれていると思う部分、印象的な表現を抜き出して、原稿用紙に書き写す。

※三つの作品の中から一編選んで、読んでいない人に紹介する紹介文を書く。または、感想文を書く。(紹介文、読書感想文の書き方)

○筆者の論証のしかたを参考にして、ある課題について論証的に書く。

(文章構成)

○新聞の社説やコラムの文章の構成を調べる。(文章構成)

○印象に残つた詩歌について鑑賞文を書く。

時期	単元	教 材	単元(教材)の位置づけ(総合化のために)	
一 学 期 (基 本 学 習)	1 人生と 言葉 (随想)	自己発見 (湯川秀樹)	導入・基本単元 創造的な生き方—高校生としての自覚 (自己を見つめる)	
		言葉の力 (大岡 信)	言葉をもつめる—高校国語学習の出発 古典の意義	
	2 古文に親しむ	平家物語 ○忠度の都落ち ○木曾の最期	基本単元 1. 古文に親しむ(朗読, 生き生きとした登場人物をとらえることを通して) 2. 文法(古典文法入門) 古語と現代語の違い(かなづかい, ごい, 文法) ↔ 「言葉の力」	
	3 小 説	物と心 (小川国夫)	基本単元(小説の読み方を知る)	浩の心の動きと, 浩と宗一の感情の交流を読みとる。 ↔ 「自己発見」
		羅生門 (芥川龍之介)		1. 作品の舞台設定(時代, 場所, 時間, 主人公の状況など)と, 主人公の心理の変化を読みとる。 2. 比喩表現の巧みさ ↔ 「言葉の力」
		古 都 (川端康成)		描写のすぐれている部分をよみとる。 ↔ 「言葉の力」
4 漢文に親しむ	格言・成句 故 事 唐 詩	基本単元	1. 漢文に親しむ(朗読, 既知の格言成句などの学習を通して) 2. 漢文のきまり(1)(訓読のきまり, 漢文の組み立て) ↔ 「古文に親しむ」 ↔ 「言葉の力」	
5 意見と表現	言語と文章 (谷崎潤一郎)	基本単元(評論・説文)	言葉の果たしている役割を理解する。 ↔ 「言葉の力」	
	日常性の壁 (安部公房)		筆者の論の展開のしかたをとらえる。 (評論・論説文の読み方)	
	命拾い (深代惇郎)		筆者の論の展開のしかたをとらえる。 (評論・論説文の読み方)	
6 詩 歌	鯨 (高村光太郎) 小景異情(室生犀生) 贅のうへ(三好達治) 雪の日に(吉野 弘) 藤の花(短歌15首) 手毬唄(俳句15句)	基本単元	1. 詩歌に親しむ(朗読を通して, また, 情景, 心情を味わうことを通して) 2. 詩歌の鑑賞のしかたを学ぶ ↔ 「言葉の力」	

「理解」と「表現」(書くこと)の関連(「表現」指導の体系)

○論旨を展開するに当たって材料をどのように使っているか整理する。

○文体の特色を考える。(叙述)

○擬態語や擬声語の使用部分を抜き出し、それぞれの効果を考える。(叙述)

○感想文を書く。

○二つの手紙文の特徴を考える。

○文章を客観的事実と考察・意見の部分とに分ける。(構成・叙述)

○印象に残った歌をとりあげて鑑賞文を書く。

○「自然と私」「日本人と自然」「自然と文学」などの題で文章を書く。

ながら指導し、学期末にまとめる。

時期	単元	教 材	単元（教材）の位置づけ（総合化のために）	
二 学 期 （基 本・発 展学 習）	1 自然と人間	鳥と名と （唐木順三） 自然への回帰の旅 （辻 邦生）	導 入・ 基 本 単 元	1. 自然と人間のかかわり方、「日本人の自然観照の深さ」ととらえる。↔その後の古典、小説学習の課題とする。（教材関連学習→学期末に総合化） 2. 随想の特質を知る。
	2 日記と物語	土佐日記 伊勢物語	基 本 単 元	1. 日記文学、歌物語の特色を知る。 2. 文法…用言、一部の助動詞の学習 ↔「鳥と名と」「自然回帰への旅」
	3 小説	城の崎にて （志賀直哉） 富岳百景	基 本 発 展 単 元	1. 近代小説の知識を深め、小説に親しむ。 2. 自然と人間について考える。 ↔「鳥と名と」「自然への回帰」
	4 中国の散文	十八史略 論 語 孟 子	基 本 単 元	1. 古代中国人の理想の社会に対する考え方や生き方を知る。 2. 漢文のきまり (2) …基本句形
	5 手 紙 と 報 告	山の便り	基 本 単 元	手紙文の特色を知る。
		氷期の野尻湖		報告文（レポート）の特色を知る。
	6 和歌の流れ	万葉集 古今和歌集 新古今和歌集	基 本 発 展 単 元	1. 和歌の鑑賞のしかたを知る。 2. それぞれの歌風の特徴を考える。 3. 文法…助動詞 ↔「鳥と名と」「自然への回帰の旅」
7 自然と人間	鳥と名と 自然への回帰の旅 城の崎にて 富岳百景 万葉・古今・新古今集 （土佐日記・伊勢物語）	発 展 単 元	「鳥と名と」「自然への回帰の旅」に述べられていた自然と人間とのかかわり、自然観照の深さが、他の作品の場合は、どんなところにかがえるか。その部分を指摘し、自然と人間のかかわり方の特色について考える。	
三 学 期 （基 本・発 展学 習）	二学期と同じように、最初の単元である「社会と個人」に内容的には関連させ			

見つめ、言葉の力を認識していく上に成立するものであることを考へると、この教材が高校国語学習の冒頭に採られているのは意義深いことであると思われる。

この二教材を基本に据えて、その後の学習を展開させたい。

「平家物語」では、古文に親しませることを中心のねらいとする中で、現代語とは違った古語の豊かさ(古語の「言葉の力」)にも気づかせたい。小説学習においては、主人公の心情を読み取ることを通して自己を見つめさせ、「自己の発見」と関連させる。とくに「物と心」、「羅生門」の学習において、また、「羅生門」の巧みな比喩表現、「古都」の描写のすぐれている部分を読み取ることを通して、「言葉の力」を認識させたい。また、「意見と表現」では、言葉の果たしている役割をとらえることを通して(「言語と文章」)「言葉の力」を認識させ、発想の転換の必要性を読み取ることを通して「日常性の壁」、「命拾い」、広い視野から自己を見つめさせたい。以上のように、一学期は、基本学習としてそれぞれの教材をきちんと読み取ると同時に常に冒頭の二つの基本教材と内容的に関連させるような授業展開にしたい。

◇二学期

二学期も一学期と同様に、冒頭の単元である「自然と人間」を基本におき、それぞれの教材をこの基本教材と関連させながら授業を展開させた。そして、まとめ及び発展学習として、二学期の終わりに、「自然と人間」というテーマで、「鳥と名」と「自然への回帰の旅」に述べられていた自然と人間のかかわり方や日本人の自然観照の深さについて考察させたい。もちろん教材は既習の「土佐日

記」「伊勢物語」「城の崎にて」「富岳百景」「万葉集・古今・新古今集」などであるが、さらには、「自然と人間」というテーマにふさわしい新しい教材をとりあげることが可能であろう。この方法は、一学期の教材関連学習と主題単元学習とを融合させたものといえよう。

三学期も二学期と同様に、それぞれの教材を可能な限りにおいて冒頭の単元である「社会と個人」に内容的に関連させながら指導し、学期末にまとめた。

次に、「理解」と「表現」との関連(方法の総合)ということについてであるが、表のように、それぞれの教材について「表現」及び「表現」と「理解」を関連させた課題をあげているが、まだ思いつきの域を出していない。関連的指導としては、「理解」に重点をおく場合や「書く」ことを通して「理解」を深める、「表現」に重点をおいた「理解」指導(「書く」力をつけるために作品の主題、構想、叙述を分析する)も考えられるが、指導の効率という点からいえば、「書く」力(表現力)と「読む力」(理解力)を同時に高めることのできる真の関連指導がめざされなくてはならない。

四、課題

「国語工」はこれから実践していくのであるが、年間指導計画を考へる中で、明確にしなくてはならない点や配慮しなくてはならないことがたくさん浮かびあがったが、次の四点を重点課題として考へていきたい。

1、「国語工」の位置づけを明確にする。

「国語Ⅰ」は「国語Ⅱ」や「古典」などの基礎的な科目という位置づけがなされているが、ここでいう「基礎」とはどういうことなのかがいまいである。したがって、「国語Ⅱ」「現代文」「古典」「国語表現」を見通した「国語Ⅰ」の指導の体系化をはからなくてはならない。

2、古典入門の指導に関して

教科書の単元配列に従って授業を展開させるとすると、古文は「平家物語」を五月上旬に学習すると、二学期の九月下旬まで古文学習はないことになる。漢文のばあいも同様に長い学習の空白ができることになる。「古典」を「現代国語」と分離独立させて指導することになったものにとつて、この空白への不安は大きい。そこで、それを少しでも解消するために、次のような方法が考えられるのではないかと思う。

(A) 古文の単元をふやす。

たとえば、一学期の場合、「2、古文に親しむ(1)」の教材として、「今昔物語」や「宇治拾遺物語」などの中から親しみやすい内容のものを学習させ、「5、意見と表現」の後に、「6、古文に親しむ(2)」として教科書の「平家物語」を学習する。文法は用言までを学習する。

(B) 現代文と古典を分離させる。

「国語Ⅰ」5単位を、現代文3単位、古典2単位に分離して、それぞれ一貫した指導をする。その際、現代文と古典を同一人が指導することにより、できる限りの総合化をはかる。

3、「表現」と「理解」の関連学習に関して、

(1) 「関連」ということを明確にする。

すでに述べたように、真の関連とは、「理解」力も「表現」力も同時に高まるような関連のさせ方ではなくてはならない。教材を深く研究する中で、そのような関連指導を追求したい。

(2) 「表現」指導の体系化をはかる。

作品の内容にそくしてアト・ランダムに書かせればよいというものではない。効率的に表現力を高めるためには、「国語Ⅰ」においても「表現」指導の体系化をはからなくてはならない。

4、作品の特性を生かした「総合」学習を追求する。

教材関連学習や主題単元学習では、「関連」とか「主題」に重点を置くことによって、その作品のすばらしさ、独自性、特性が見失われるおそれがある。「国語Ⅰ」では、一つの教材(作品)は、まずは独立した世界のものとして鑑賞・理解させ、その上で、「総合化」がなされるべきであろう。

以上、実践の方向と課題のみを述べてきたようであるが、この試案の結果については、具体的な実践を通してまたの機会に報告させていただきます。こうと思う。

(広島県立安古市高等学校教諭)